

漫述（佐久間象山）

謗^{そし}る 者^{もの}は 汝^{なんじ}の 謗^{そし}るに 任^{まか}せ

嗤^{わろ}う 者^{もの}は 汝^{なんじ}の 嗤^{わろ}うに 任^{まか}せん

天公^{てんこう} 本^{もと} 我^{われ}を 知^しる

他人^{たにん}の 知^しるを 覓^{もと}めず

謗者任汝謗 嗤者任汝嗤
天公本知我 不覺他人知

解説 鎖国攘夷の論が喧騒^{けんそう}をきわめる中であつて、象山一人開国進取説を唱えたので、世間の非難と嘲笑とを一身に浴びた。しかし、象山は信ずるところがあつて意に介さなかつた。この詩は、その心境を歌つた詩。

語釈 ※漫述 〓 なんとはなしに自分の心もちをいいあらわす。

※謗 〓 他人を悪く言う。非難する。※嗤 〓 あざわらう。※天公 〓 天の神、天帝。※覚 〓 さがし求める。

通釈 この自分に対し、悪く言うものは気のすむまで謗るがよいし、あざわらう者もまた、心ゆくまで嗤うがよい。天の神だけは、もちろん私の正しさを理解していただくさる。だから、他人に弁解して、私を知つて貰おうとは思わない。